

Power Network!! Presents
2012
Winter

ドラゴンクエスト
魂

LOCAL DRIVEN

LOW BUDGET
HIGH QUALITY

新刊
雑誌

I CAN?
YES
YOU CAN!

龍が如く
神皇正統記
No. 7

■ 二つのアプローチ

ながたです。お世話になってます。

今日は思い出語りをしつつ、まいどおなじみ人間の「認識」のお話から入ります。

私たちは世界を認識する時に、二つのアプローチを場面場面で用いて日常を過ごしています。

一つは「科学」的と呼ばれるもので、物事を要素に

分解し、モデル化して仮説を立てそれを検証しまた組み立てる、それを繰り返すことによつて把握する方法。そこには原因―結果、理由―行動の因果律が働いている、という前提があります。「合理的」なアプローチ。

もう一つは「悟り」や直観と呼ばれるもので、あるとき突然「わかる」。手の技身体の技で私たちも普段よく経験します。例えば「自転車の乗り方」を言葉で綺麗に説明出来る人はほとんど居ないと思いますが、ほぼどなたでも若干の訓練で乗れるようになる。「神秘的」なアプローチ。

個人の生活ではなんとなく使い分けているように見えるこの二つのアプローチですが、しかし、社会的な問題になるとコンフリクト（衝突）を起こし、混乱や危機を招きます。

天安門事件を思い出してください、「秩序を維持する」ために国民を戦車で轢き殺す。

なんという矛盾でしょう。国民の幸せのために秩序があるのに。

あるいはたとえば農薬の過剰使用で環境が悪化する。

前者のアプローチで「合理的に」考えれば（今風の言葉でいうと）「使用量を環境と農業が持続可能な量に制御する」というだけのことでしよう。それが、いざ問題になると農家・メーカー・行政・環境保護団体が血で血を洗う精神的時に物理的殴り合いを延々と繰り返す。合理性ではない部分が、合理性を凌駕する。

九〇年三月、高校の卒業旅行で大阪から九州へ向かうフェリーの二等船室で気のおけない友たちと車座で語り合っていた時に僕は、

「これを、なんとかせなあかんねや」

と力説していました。

時あたかもバブル経済。世の中を何も知らない高校三年生にとっても明らかに変な社会で、日経株価が四万円に迫り千葉の山奥に四億の豪邸が建って「チバリーヒルズ」なんて言ってた時代です。環境平和貧困、全ての問題に目をつぶっていたいや、目をつぶりたいがために、お金だけ見ていた時代。

どう考えても、なにかがおかしい。

この社会の「おかしさ」の根本的な原因。これが、僕はこの二つの認識が錯綜してるところにある、と睨

んだんです。

科学で判断すべきところを感情が邪魔をし、感情や感覚でしか決められないところまで科学が土足で踏み込む。

この二つのアプローチを「うまく使いこなす素敵なやり方」を見つけないければ、社会がうまくいかないし、それによって僕ら個人も被害を受けるし、いや、いずれ個人の中でもその二つのアプローチの齟齬が、個人ヒストリ上重大な危機をもたらす……

その予感悲しいかな、この毎年沢山の人自殺し、お年寄りが半ば捨てられ、過半を超える若者が「結婚

なんかできるわけない」と思うような、悲惨な社会となつて実現してしまいました。

……と、こう語ると実に未来が見えててカッコイイのですが、現実はもちろんこんなにクリアに言語化できてたわけはなく、

「このままじゃあかんとと思うねや俺！

たとえばシャンプー！ あんなもん界面活性剤やで！？ そんなんで頭皮洗つてたらハゲるだけやんか！
なんでそんなものを使う必要があるねん！ 騙されてるんや、みんな！」

とかそんな調子です。言いたいこと何も言えてませんね。

「せやけど石鹼で洗ったらキシキシするで」

「キシキシせえへん石鹼を開発したらええねや。それを技術の進歩・科学の勝利っていうんや」

「考えすぎちやうかなあ。だつてみんな使つてるし」
そう言つてたI君が今もふさふさで、化学合成シャンプーを避けてた僕が薄毛なのが人生の皮肉ですが。

大学へ入ったら、もう少しそんなことも学べるのかな、と思つてたのですが、入つて知つたのは大学とは

どちらかというところ、主に前者のアプローチの技術を高める場所だ、という事実でした。

もちろん後者的な、ニューエイジ風思想・哲学の残り香がまだあった時代でしたので、精神世界的な分厚い書物が大型書店にはよく並んでいて、それらをつまみ食いして小首をひねったりもしました。が、そっちはそつちで後者の総本山に前者のアプローチで切り込むという、まさに直感的に劇薬を忌避する農民にマウス実験のデータを見せて説得に行くのと同じ、大変スジの悪い戦いを繰り広げていました。実際、その手の本を読んでも読んでも残るのは消化不良感ばかり。

また、当時凄い勢いで勃興してた分子生物学とか、カオス（複雑系）とか、そちらの本は非常に興味深かったのですが、いかんせんこちらは新しすぎて専門知識が無いと食い切ることができません。さりとて今から理系を勉強し直して研究するガッツは無し……

オロオロしてる間に四年が過ぎ、こんな中途半端な状態では社会に出るとか仕事をするとかホンマにできるんかいな、という感じでしたが幸いにもある大企業に拾ってもらい、「社会人」になりました。

ひよつとすると「社会」に出れば、頭で考えている

のではないもつと体的な知恵が身につくかもしれない……と薄っすら期待しつつ。

ところが、そこで目にしたものの体験したものこそ、
またもやこの二つのアプローチの衝突と混乱そのもの
だったのです。

とにかく仕事の八割五分は「社内のコンセンサスを
得る」ためのもの。商品力向上にもお客様の利益にも
なんの役立たない書類やプレゼンづくり。それも商品
企画屋である僕だけがそれならいいのですが、みんな

してそんなことをやっているのです。

なぜそんなことをやらなければならぬかといえは、「説得」つまり意思決定が、数字や理屈だけではできず、感情や直観だけでできるわけでもなく、なんだかそれら両方をぐちゃぐちゃと並べて時間を掛けて、

「空気」を熟成させてそれで決めるしか無かつたからです。

しかもそれだけ練れば寝かせば、よい決定ができるかというとなんかともなく、思いついてすぐ行動して結果から判断して継続撤退を決めた方がよほど成功率が高いのではないだろうか、と思つたほどです。

現実に立ち上がり直後、伸びる時期のベンチャー企業は決断が早いですね。

ここでも人間は、意思決定——「判断」のよりどころを、失っていました。

当時のその会社は（業界的に言うと）小さいなりに活気があり、官僚的な動脈硬化はまだ少ない、いい会社でしたので、この会社でこうならもつと古い会社や大きな会社は一体……と思っただけです。

そんな日々にくたびれ果てた僕は退社して別の仕事を始めたのですが、そこでも取引先でチーム内で同じような衝突があり、ゲーム会社に入ってコンテンツ作成のような「感性の仕事」に取り組んでみても、結局は最後の決定のところでの「よくわからないぶつかりあい」が起きます。

言い方を換えてみます。

理詰めの説得ならそれでいいんです、僕を理屈で合理的に納得させてください、と。

そんなことできた人居ないです。

逆に感情感覚直観、専制君主のように「こう決めたから」ならそれも良いです、ただし、自分が好みで決めたことを記憶しておくことと、全ての責任をご自分で取ることでだけは忘れずに。

こちらはたまにありますけど、稀ですね。

結局、日本式の意味決定は、「誰がどう決めたかわからないけどなんとなく決まって、下手な結果が出ても誰も責任を取らない」。

もうおなじみすぎて涙が出ます。みなさんも日々よく経験されるでしょう。

ですから僕は、一七、八からもう二〇数年これを考え、考え疲れてくると逃げるように熱中できる仕事を見つけてきてそれに没頭して、それが終わるとまた同じことを考えて、でもやはり一步も前に進まなくて、また仕事に逃げて……という繰り返しをやってきました。僕の青春はまるまるこの問題で潰したと言つても過言ではありません。

まあ熱に浮かれたように何かで潰してしまう時期のことを「青春」と定義づけるのかもしれないが。

「知ってしまったからには、知らないふりはできな

った」

大学で原子力工学を学びながら反原発の道に足を踏み入れ以来四〇年、闘い続けた男・小出裕章氏（京都大学助教）の言葉です。

だから僕は、社会の、いや人間の様々な問題の根がこの「認識アプローチの混乱・衝突」にある以上、ここをなんとかしないと、その上に乗っている各種問題なんて根源的には解決するはずもない、と思いました。もちろん今でもそう思っています。

しかし人間四〇歳も近づいてきますとだんだんパワ

ーもスタミナもガッツも衰えてきて、

「ここまで二〇年もやってきてなんの成果も出なかつたんだから、これは僕ごときが手を触れてはいけないう大問題、数学で言えば『フェルマーの定理』のようなものだったんだ。ああ無駄なことにも人生使っちゃまった、もうあとは好きなラブコメでも描いて細々と生きよう」

なんて諦めかけてました。ちようど長年描いてた『星の王子くん』も無事発売されましたので、ちよつとのんびりしよう、と。

ところがまさにその時。

原子炉が爆発したのです。

■二一 日本、ついに発狂す

原子力発電ってあれ何をしているのかと言いますと、お湯を沸かしてるだけなんです。火力発電所で天然ガス・石炭・重油を燃やしてお湯を沸かしてタービンを回す、それと同じことを、あんな複雑怪奇で危険なシステムでやっているのです。

そもそもからして、炉心の最高温度は二八〇〇度に達します。それを水をかけ続けることでなんとか冷やしている。それを鋼鉄、一五〇〇度で溶け出すもので

包んで「五重の壁で安全」などと胸を張っているのです。

根本的におかしい。

「科学」の粋を尽くした、なんてとんでもありません、「非科学」の極みです。

事故が起きてからも出るわ出るわ、大島堅一教授（立命館大学）が電力会社の有価証券報告書という実績データから計算しなおした発電原価は、火力を上回ってあらゆる発電の中で最も高価。これはもちろん福島事故の補償や除染は除いて、です。

これを安い安いと言い、原発が無ければ（電気が高くなるので）経済が回らなくなると脅してきた。

さらには活断層の専門家・渡辺満久教授（東洋大
学）が調べたところによると日本の原発で「活断層フ
リー」は九州の玄海原発だけ、残り全ての、もんじ
ゅ・六ヶ所を含む原発の下か近くに活断層が走ってい
ます。

つまり「建てやすいところに審査を甘くしてとりあ
えず建てた」というのが実情で、活断層の上にあつて
はどんなに施設・建物に耐震性を持たせても無意味で
す（裂けてしまう）。

つまり、ムチヤクチャ。

繰り返しますが「科学」の城であるはずの原子力発電所こそが、得体のしれない意思決定、少なくとも

「科学的ではない」判断によつて、「なんとなく」そこに建っている。

そんなものがこの狭い日本地震大国津波大国日本に五四もある。

背筋が凍る話ですが、それでもなんとか一本蜘蛛の糸のように残つてた僕の理性をブチン、と切つたのが

当時の、野田首相。

大飯原発を再稼働する。

この一六万の原発災害の被災者の方が故郷を追われ
今も流離う現状で、もしなんらかの事情でなんと
しても動かさねばならんというのなら、せめて今考えう
る安全施設を増設し、今回の知見を元に大規模な避難
訓練もして、それでも万が一事故が起きた時にはどう
いう補償をどういう財源とするのかを定めてすくなく
とも経済的な安心感を与え、それで初めて「いかがで
しょう？」ではないでしょうか。それがギリギリ譲れ
る最低限の線だと思えます。

それら一切なし、ただ動かす。

「……狂ってる」

最近僕がよく使うこの言葉は、この時を境に噴き出すようになりました。

仮にも日本のトップが、リーダーが、完全に発狂してるのです。論理的に考えてあたりまえのことに手も付けず、努力をする素振りも見せず、ただなにかに突き動かされるように

「さっぱり根拠のよくわからない」
決定をする。

これぞまさに僕の長年のテーマ、認識齟齬、そのものです。

だからまだ、極端な言い方をすると、天皇陛下が「日本は原発教の国なので、ご神体を動かさないわけにはいかない」とでも宣旨をくだされば、それは科学や論理ではなく「宗教」に類することなので、「しようがない」のです。

今もタリバンは文化的価値の高い仏像を破壊しています。それは彼らの認識においては価値のないものだからです。

それならまだ、わかる。賛同はしないけれど「僕がその立場ならそうするかもしれない」とは思える。

しかしもちろん日本は、「そういう国ではない」はずです。法治国家、民主主義国家であると。実際、天皇陛下始め宗教指導者が政治にコミットすることは——「宗教政党が衆議院に三〇ほど議席を持つ以上、「無い」というと語弊がありますが——一応、避けられている建前になっています。

ところがこの肝心要、ものすごく多くの国民の命と財産が危機に晒されているこの瞬間に、このような

「わけのわからない」決定をする。

これは野田佳彦個人の資質（だけ）ではない。なんとなればそれを政権与党の多く（小沢氏一派を除く）が支持し、自民・公明など野党の大勢力も支持する。国会前で（主催者発表であることを割り引いても）数万人のデモが毎週行われ、パブリック・コメントで九割に及ぶ人が脱原発を志向していても、その声をまるで聞こえていないかのように黙殺する。

狂ってる。

もしこれが狂っているのではないならば、僕が狂って

いる。

ようやく本気で恐怖した僕は様々な情報を集めはじめました。その中で、ビデオジャーナリスト神保哲生氏率いるネットメディア、ビデオニュース・ドットコムに出演されていた安富歩教授（東京大学）に出会うわけです。

（このあたりのことは前書『抗発狂薬』もご参考のこと。webで読めます）

<http://rakken.net/freetalks/freetalk.html>

■二二二 でも自分も狂ってた

その安富先生の著書、『原発危機と「東大話法」』
を読むと、「いや、あいつらおかしいですよ」とちゃ
んと書いてある。「ですよね！」と本に向かって相槌
を打つ僕。「この人は信用できるぞ」と思った僕は安
富本を片っ端から取り寄せ、貪るように読んだわけ
です。

結果わかったのは、
世界は今だけじゃなく日本だけじゃなく、

ずいぶん前から狂ってしまっているんだ。

マジですかー！

まさか、自分の足元まで狂っていた、そして、自分も狂っていたとは、さすがの疑り深い僕も、思いませんでした。

災害への備えを薦める番組で「楽観バイアス」という言葉を目にしました。人間は自分が死ぬとは思わずに日々を生きている。実際、そんなことを四六時中心

配しては、生きづらくてしようがない。

その類で、「正常性バイアス」、自分の回りの環境が「正常」であると思ひ込みたい心理的な偏りが、人間にはあります。

つまり誰も、「世界がおかしい」と思った時に、「自分がおかしい」あるいは「自分もおかしい」とは思わない。

盲点でした……二〇年も同じこと考えてきて、その起点となる自分自身を疑わなかったのは、気付かされてみれば実に愚かです。

いや、より正確に言うなら「疑ってるフリ」はしてたんです。でもそれは手法とか論理とか、手段的な部分だけを疑って、自分の認識そのものには絶対とも言える信頼を置いていた。

そしてここが、こここそが、つまり僕のように「自分は疑わない」ということこそが、最大の問題だったんです。

つまり相反する、相容れない二つのアプローチの存在が問題なのではなくて、それを使う自分自身こそが、問題なのです。

■二三 孔子登場

「君も狂ってるよ」

と指摘しただけでは飽きたらず安富先生は『生きるための論語』で、孔子のあまりに有名な言葉をひいてトドメを刺すのです。

「『知る』とは『知っていること』と『知らないこと』を分け続ける運動だ」。

これを読みました時「あ、なるほどね……ああつ!?」と椅子から転げ落ちそうになりました。

僕が長年悩んだ問題が、ここに解決している！

僕は二つのアプローチを、並立する二つの機械のよ
うに見立て、僕という操作者がスイッチを押してどち
らを動かすか決定している、そんなイメージを持って
いたのです。

そうではなく、Aの機械がうまく働くところまでそ
れを用いて、働きが悪くなったらその機械を改良して
もつと働くようにしつつ、全然働かない領域ではBの

機械を使う。

そんな感じでしょうか。

こう書くと「えっ……そんなあたりまえですよん」と思いますでしょう。

ところがこれが、人間できないんです。

できてれば戦争なんか無くなってるはずです。あれは問題解決手段としてはコスト面でもパフォーマンス面でも最悪だ、と歴史学でも社会学でもなんでもまず基本として学ぶのに、人間はあれに手を出す。なぜか。合理的に解決すべき問題に、感情が食い込む。逆に、

感情に十分配慮すべき時に、合理性で押し通そうとする。

前者は尖閣問題、後者は沖縄基地問題を思い起こされればよろしいでしょう。

どうやら問題が大きくなればなるほど、深刻になればなるほど、人間はこの孔子の言うあたりまえのアプローチを忘れ、二つのアプローチの間でオロオロするもののようなのです。

というよりも、「二つのアプローチがあつて、孔子

が言うように、使い方に十分注意しないとイケませんよ」ということと自体の認識が、まったく一般化していない。

僕はこの国で受けられる教育を十分受けさせてもらった方だと思いますが、それでもなお二千年前から東洋のスタンダードであつたこの考え方を、十分自分のものにできてませんでした。やはり近代日本はそれこそ明治維新前後から総発狂状態が、百年今もなお続いている、と考えるべきかもしれません。

一例を挙げれば、「おばけ」という概念があります。
ほとんどの方が、

「『おばけは居ない』というのが科学的」という認識です。しかし孔子的に言えば、

「『おばけは居るか居ないかわからない』というのが科学的」
です。

ほら、納得してないでしょう？（笑）

「科学」というのは、孔子風に言うと、わかっているところを整理して理屈で串刺しにしてよりわかりやす

くして、納得し、またわからないうところへ一歩踏み出しては、「どうやったらこれを理解することができるのかな？」と考える、考え続ける、その行為そのものです。

とすると、「おぼけ」はわからない領域に属するものなので、真の科学者は、いったいどういうものなのだろうか、と想像力やもちろん既存の理論を駆使して、その正体に迫る。

「居ない」と決めつけることや、なんでもかんでも既存の理屈を当てはめて無理に整理してしまうことは、

「科学的」ではありません。

……こう考えると、いかに普段「科学的」という言葉の間違って（非孔子的に）使っているか。

たとえば先日中村勘三郎さんが惜しくも亡くなられましたが、あれはどう見ても医療の失敗です。

「ガンは治るもの」という「決めつけ」を真理、科学だと思い込んで、しなくていい（かもしれない）手術をして、合併症が起きて、亡くなった。

「ガンはどんなものかハッキリわかってない、だから治せることもあれば治せないこともある」これが現代

の科学の最先端です。だとすれば、あらゆる治療は「成功するかもしれないし失敗するかもしれない」という但し書きつきで行われるべきです。そうなるのであれば、あらゆる選択は賭けになります。選択しないことを含めて。ならば失敗は、「賭けに負けた」という納得がいく。

失敗が問題なのではなくて、失敗の可能性が隠蔽されているのが、問題なんです。

この例を出したのは、つまりこの現状がなぜ起きているのか、その説明になるかとも思ったからです。

「そんな……病院行ったら治るって『信じて』たいや
ん！」

という（素直な）その気持ち、そこそが付け入れられ
どころ、二つのアプローチの混乱の源泉、なのではな
いかと思うのです。

■二四 超近代

根本的な原因は、「近代」にてあまりにも猛威を奮ったデカルト&ニュートンのいわゆる「科学」に対して、盲信に近い信頼を置いてしまっているから、ではないでしょうか。

確かにこのアプローチ一本で、天然痘を撲滅し何億という人が昔の王侯貴族以上の生活ができ月へ行けたり世界中の人とリアルタイムでタダでチャットができた。

とはいっても、その「科学」が効く領域が広がるほ
どに、それが効かない「悟り」の領域との差が広がっ
ているのも事実です。

どんなに満たされていてもいつか死ぬ。愛する家族
ももちろん自分も。健康さえままならないし、好きな
人は振り向いてくれないし、上司や市場は理解がない
し、そもそも窓の外では「科学の城」原発が爆発する
のです。

だから、ドイツは福島事故を見て、そこまでは原発

推進派だった物理学者にして首相、アンゲラ・メルケルは脱原発に一八〇度舵を切りました。この時、もちろん科学者の議論と共に、倫理学者や宗教家も呼ばれた会議が行われました、ここで主題になったのが「残余のリスク」という考え方です。

原子力発電所というシステムには、どこまで合理的に計算していっても、最後に残ってしまうリスクがある。これを残余のリスクという。これにどう対応するか。

最大のリスクを計算出来ないのなら、そのシステムを採用すべきではない。

これがドイツの出した「判断」です。

翻つて日本では、当初東電・国は「想定外」だと言いました。しかし「こんな大惨事を想定できないなら、やったらダメだろ」というまさに残余のリスクを指摘され、引っ込めました。しかしもちろん「想定内」であるならば対策を放置した人災であり、責任は免れません。

このデッドロックにハマって言い訳をしたくでもできなくなっているのが現状です。

つまり孔子の「知」はすでに、賢明な人々や真剣に考える人々が採用し始めているアプローチなのです。近代を超えて。

日本がなぜそれに乗遅れ気味かといえ、もちろん「近代」で世界で最も成功した国と国民だから、でしょう。二〇世紀百年まるまるバカ当たりを続けた成功体験を簡単に捨てることはできません。

新興国がまるごとそれをコピーしたアプローチで追いついて、豊富な人的資源と金余る先進国富裕層からの投資による資金を元に「同じゲームに乗ってれば負

ける」のは目に見えているのにまだそのゲーム盤にへばりついている。

また見方を換えれば、「近代」というのはつまるところどういう時代かといえば、「国家」というフィクションを成立させるために「兵士」と「工員」を量産するシステムで、そのためには「自分で考える」「自分で感じる」そして「自分で判断する」ことはマズイわけです。

「知る」ことによつて自分を変革していく、そういう人間は（大多数の場面で）困る。

学校教育でも社員教育でもさかんに独創性や創造性という言葉が踊りますが、そんなものが「フリ」であることは皆さんご承知のとおり。そういう方向を育てる時間・労力の何十倍ものエネルギーが、「与えられた正解を高速・高効率にこなす」という機械的能力を鍛え上げることに使われています。

これでは、ダメですよね。

やはり孔子の言う「知」の運動を復活させねばなりません。

■三ー ソウルドライブ

ここでもう一つの視点を導入します。
「魂の脱植民地化」という考え方です。

これは安富先生や、その共同研究者である深尾葉子氏（大阪大学准教授）の提唱されてる概念です。

我々は様々な原因によって、本当の自分、「魂」の上
上にフタをして、その上に各種の仮想の人格を作り上
げ、その「自分でない人生」を生きている。たとえば

ある会社の会社員としての、あるいは父親母親としての、「立場」を生きる。

これぞ「魂の植民地化」。

これをなるべく、フタを開けるもしくはズラすできれば破壊することによつて、本当の自分を生きていこう！という運動です。

（さらに詳しくは安富本各種か、深尾先生の著書その名も『魂の脱植民地化とは何か』をお読みください）

「アイヒマン裁判」というものがあります。世が世なれば田舎の郵便局長でも立派に勤め上げたであろう真

面目で従順なアイヒマン、しかし彼は彼にとってもそして人類にとつて不幸にもナチ親衛隊員であり、その勤勉さをもつて大量のユダヤ人虐殺に延々と関与し続けた。

これを罪として裁けるのか。

現代に生きる我々はどうしても幾分か彼に同情してしまいます。「命令だから」「仕事だから」「生活がかかっているから」「自分も同じ事をする、かも、しれない。」

しかしそれは果たして魂が納得する「いいこと」でしようか。

やはり、違いますね。

この問題についてまた孔子はこうも言うのです、

「自分のやりたくないことは人にするな」（安富訳）
あたりまえのことを言っているようですが、アイヒマンの立場に立てば、どうですか。職があるいは命を賭けて、命令に反することができますか。

本当の自分の魂を生きる人ならば、そこで昂然と顔を上げて不服従でしょう。

こういう人が増えれば、また自分はそのままでではなくてもそういう人を理解し応援する人が増えれば、世

界はよくなるはずだ。悪くならないはずだ。

僕もこの考え方に大賛成です。

他人の地平を生きることはとても息苦しいことです。鬱病に代表される現代日本の「生きづらさ」の原因は、この立場なり役割なり、つまるところ「自分ではない何か」を生きねばならない、と思い込まされ、また実際そう強制させられ（ているように感じ）ているから、ではないでしょうか。

魂を開放し、活性を蘇らせ、その力を発揮する。

しかし言うは簡単ですが、これでは雲をつかむような話です。一体どうすればいいのか。

僕が（もちろん安富本を参考に）前書『抗発狂薬』でまとめたポイントは、三点。

- ・一 ハラスメントをしない・させない
- ・二 魂のしあわせを追求する
- ・三 学習回路を開いておく

詳細は前書に譲りますが、しかしこれだけ見てもやつぱり、たとえばダイエットをやるとして「あまり食

べずに」「よく動く」と言ってるようなもので、そんなことはわかっとするわい！

もう一段階、たとえば「測るだけダイエット」や「低炭水化物ダイエット」のように、具体的な行動に落とし込める指針がひとつあれば、日々の生活でも気をつけやすいのに……

と、何よりも自分が自分の魂をより解放したいがために、ウンウン唸って数ヶ月考え続けました。

そんな簡単には出ませんね……
ただひとつ、その考え続ける過程で、あつ、もしや

これは、と気づいたんです。

ここで孔子様に戻ります、

「知とは『知っていること』と『知らないこと』を分ける続ける運動のこと」だと。

で、あるならば、魂の解放もまた、

「魂の解放とは『解放されているところ』と『まだ呪縛に囚われているところ』を見定め続ける運動のこと」

ではないでしょうか。

つまりこうやって、「どうやったらより魂がイキイキと働くのだろう？」と試行錯誤を続ける毎日、これこそが、魂の解放。

あ、俺あつたまいー！と一瞬思ったんですが、『青い鳥』はじめ芸術で死ぬほど描かれている超普遍的テーマですね（笑）

だから「幸せは歩いてこない、だから歩いて行くんだよ」という歌詞は誤解を招く歌詞でして、歩いて行つた先に幸せがあるのでなく、幸せ求めて歩くことこそ幸せである。

ここに至って僕の長年の宿願である、「認識の二つのアプローチの統合問題」と、最近知り全くそのとおりだ、と深く頷き自分もそうありたいと考える「魂の脱植民地化問題」が結びつきました。

つまり

「理屈の効く部分は理屈を効かせ、
神秘に属する問題には魂を働かせる」。
もつと行動に即して簡潔に言えば、
「悩んだら理屈を止めて、魂に従う」
たったこれだけのことです。

そして付属する注意点一点だけ、結果が出たら、また魂の声を聞いて、それがより魂によかったか、栄養になかったか、きもちよかったか、いいかんじだったか、楽しかったか、働きを促進したか……を感じて、良ければその方向を進む、悪ければ方向を変える、そうやって、自分自身を変えていく。そのことによつて自分の周りの現実も変えていく。

この自己改革、自己進化こそ「学習」。

「学んで時にこれを習う。

またよろこばしからずや」

です。学んだだけでは半分、それを自分のものとして魂を進化させて、学習回路ひとまわり。これを繰り返す。

簡単なことですが、しかしこれこそがものすごい応用の効く、まるで『食べるラー油』のような万能調味料なのです。

このやり方、「魂（ソウル）の動き（ドライブ）を意識する」ことから、「ソウルドライブ」と名づけました。

もちろん「魂の作動を加速するような学習ループ」
でいいのですが、ネーミングというのは大切なもので
して、「つつかけ」を「ミユール」と呼んだだけでオ
シャレアイテムになるように、新しい言葉にすれば
「新しいやり方」感が出るんです。実際「学習」と
「ループ」という馴染みの言葉がつながっていると、
「わかった気になって」しまいます。これぞ魂の動い
てない、学習の効いてない状態ですよ。だもので。

■三二 判断を迫る

さて、「ソウルドライブ」の、おなじみながた式妄想裏付け理論にもう少しだけお付き合ってください。

「魂の植民地化」の原因として、安富先生や深尾先生は子ども時代から行われているハラスメントを重視されています。

これはいわゆる児童虐待だけではなく、「いい子」であろうと「親が期待する子ども像」を生きようとし

てしまうこと全般も含みます。

そう指摘されると僕も胸が痛く、うちの両親は大変優しい親ではあったのですがしかし、僕の個性も作用したのか、なんだか「芝居」をものすごくたくさんしてきたように思います。

もちろん「いい子芝居」だけで例えば大学へ進学したりはできず、その大部分は自分の意志ではあるのですが、常に親を含むコミュニティの目を無意識にも気にして、求められる（と自分が思い込む）「ながた像」を演じていた部分も、何割かはあります。

そういう日々を続けると、そういう習性がまるで本性かのように、身に一体化してしまいます。

確かにこれでは魂にフタをしてしまう。

ただそれに加えて僕がひとつ以前から思います人間
の特性があつて、それが

「判断したくない」。

人間は脳の生き物、脳を活用することで他の動物に
差をつけ厳しい生存競争を勝ち抜いた……あるところ
まではそうだったんでしよう、しかしヘラジカの角を

持ち出すまでもなく、どんな長所も短所と裏返し、その長所が強力であればあるほど、短所も顕著に出ます。

脳というのは、ものすごくエネルギーを喰います。

飢餓状態があたりまえの今から数百年前までの人間にとつて、バカみたいに燃費の悪い「脳」を抱えていることは厄介な問題です。おそらくそれをカバーするために、人間は相当な抽象概念でも、あつという間に知識・体験をパッケージング化し、ブラックボックス化し、行つたん刺激が入れば「脳フリー」で反応が出てくる。この「自動化」が非常に得意です。

これこそ前述の「正常性バイアス」の正体で、昨日と同じ・いつもと同じことが起きてくれないと、やおおら脳を起動させて膨大なエネルギー食わせて計算させないといけません。これが嫌だから、余程のことが起きるまで「自動化の効いてる今までの出来事と同じ」と思い込みたがる。

つまり人間は、「判断」をしたくない。

判断さえしなくていいのならなんでもする。見てるものを見ないことにし、聞いているものを聞かないこと

にする。倫理も論理も、感情や感覚ですら、自ら騙す。自らの魂の声を圧殺するこの怠惰な「判断の放棄」、これぞまさに「魂の植民地化」です。

僕が体験した恐ろしい例を挙げましょう。

大阪と奈良を結ぶ第二阪奈という長いトンネルがあります。クルマでそのトンネルに近づきますと、どうも様子がおかしい。よく見れば入り口の信号は赤、

「トンネル内火災・通行止め」と電光掲示も出ている。「こりや大変だ」と僕はブレーキを踏んで車速を落としましたのですが、隣の車線、僕の前のクルマ数台、まっ

たく何事も無かったようにトンネルに吸い込まれていくのです！

えっ、まさかこの派手な表示が見えないのか？と思いつつともかくにもトンネル手前一〇〇mほどで止まりました。

そうすると、もちろん後続もそれから隣の車線も、安心したようにずらり僕に従うように止まったのです、つまり、見えてる、認識はしている。

そんなバカな、これ本当に大火事だったら、死ぬんですよ自分が！！

（その時はボヤ的なものか、誤報だったようですすぐ解

除になりました)

人生でショッキングな体験を一〇挙げろと言われれば必ず入れる、衝撃的体験でした。

つまり人間は、理性や感情、意志や本能、なんでもいいんですけれど内なる何かに導かれて「自発的に」行動してると思ひ込んでるんですけど、とんでもない誤解です。

基本は餌めがけて突進していくナメクジと一緒。一旦刷り込まれた行為をオートマチックに繰り返しているだけです。

さて、この「すぐ判断しないようにしたがる」という癖は、まさにダイエットにおける間食癖や運動不足に相当する、「ほおっておけばそうなるってしまう」という自然な性質にほかなりません。

これを直そう、というのはかなり無理な相談で、むしろ自分の周囲を「判断スイッチを入れざるを得ない」ようにすることで、サボることを許さない具体策を考えたほうがいい、と思うのです。

一駅先まで歩いて、そこから乗り降りするよう定期を買うとか、おやつを買わないように通勤帰りにコン

ビニに寄らないとか、そういう感じの。

この「判断の強制」こそまさに「ソウルドライブ」。
頭か魂、どちらで判断するかメタ判断を含めて、
判断を意識的に行う。

こうすることではいわば「判断癖」がついて、思いが
けない状況に置かれた時も、知っている知識体験にム
リヤリ引きつけて楽観的に考えすぎること防げるし、
逆に「決められない」パニックに陥ることもない……
のではないかと。

失敗を「失敗もまた貴重な体験なり」と笑い飛ばしてそれを繰り返していけば、「当たり前」が増えてきます。そうすると「判断は利益を生む」という刷り込みも起きて、判断そのものが楽しくなり、積極的に判断しようとするようになる……かもしれません。

また、普段なにげなく行なっている「魂の判断」を意識に載せることで、「自分自身」ってこんな人間だったのか！と自分に対する理解も進みます。

なんとなくこつちがいいと思つたから、こうしてみた。すごく気持ちよかつた。おお、俺はこういうのが

好きなのか。

もちろんこの成功体験も魂を悦ばしめ力づけるので、さらに次の判断でいい判断をしてくれることでしょう。

そう、判断を重ねて「現実を動かす」と、動いた現実がまた新しい判断を迫る、というループが生じます。刻一刻状況が変化していく。それにどんどん応えようとすると必然的に、

・学習回路を開いて、
対応する必要が生じます。

・ハラスメントなんかしてる・されている暇はない。

こうして選択の渦をひたすら魂と理性を総動員して選択を繰り返すことは、そのこと自体が、

・魂のしあわせを追求する

方向へと向かうことになります。

だから魂を動かして、現実を動かす。

このループを、回す。

■四一 閑話休題

● チョイス

ソウルドライブを活用しますと、身の回りを整える時に、なんでもいいんです、なにか買うとか、なにかするとか、人に会うとか、そういう時一本の評価軸ができます。

「魂の作動を邪魔するもの」を遠ざけ、
「魂の作動を促進するもの」に近づいていく。

極めてシンプルな「判断」基準です。この判断に基づいて行動すると、もちろん細かく成功失敗あるとは思いますが、それでもジリジリと「魂がよく働く方向」へ向かう。

そのたびにより魂が活性を取り戻し力を発揮しやすくなり、その結果さらに作動する方向へ向かう……という好循環が回るはずです。

● センサー

でも「魂の悦ぶ」と言っても雲をつかむような……

という場合は、なにか一つ自分の「コダワリどころ」を見つけると、それがセンサーになってるかもしれない。

たとえば「めんどくさい」なんてどうでしょう？

これも安富先生絡みなのですが、ラジオ出演された時に「東大話法」の話をしつつ、対照として京大の話になって（先生は京大出身）「学風を一言で言えば

『めんどくさい』。」と述べられたのでゲラゲラ笑ってしまいました。確かにあの大学にはまさに「楽をするためならどんな困難も厭わない」という人が多いの

です。

しかしこれはとても重要なことで、「めんどくさい」を魂の警告と捉えようと、

「もつといいやり方はないか？」

「美しくシンプルであるはずの自然が、真理が、そんなに複雑怪奇か？」

と見直すキツカケになる。ところが、将来行政官僚になるような優秀な東大生は、これを力ずくと生真面目さでバリバリやつつけてしまう。そうすると、進歩も革新もない。

もちろんこのセンサーは人によつてそれぞれ違ふと思ひます、ある人は「美であればそれでいい」かもしれませぬし、「正義が実現していなければ許せない！」かもしれませぬ。

食べ物でもそうですが、多量のメニューを見て「これが好き」と決めることよりも、「これは嫌だな」と排除する方がよほど簡単です。

それを繰り返していけば、徐々に「好き」や「向き」に合つたゾーンに入つていける、はず。

私たちは「教育」の名のもとに「嫌なものを嫌という」ことを抑圧されがちです。好き嫌いせず食べなさい、努力でなんとかしなさい。しかし嫌なものは嫌です。そのセンサーを大事にしたいところです。

■五一 超芸術

さてここでガラリと雰囲気を変えて、芸術のお話をします。

ここまで見てきました「魂の作動」を考えますと、「よりよい芸術」とは、受け取った者の「魂」を揺さぶる、動かすようなものではないでしょうか。

あるいは魂を外敵（ハラスメント）から守るバリアー、お守りになってくれるかもしれません。

あるいは魂にエネルギーを注入し、元気を復活させて現実^ニに立ち向かう力を呼び覚ますかもしれません。

太古の昔から人間が、あんな無駄なことを……常に飢餓の危険と隣り合わせであるにも関わらず、エネルギーを費やすわけです。歌い、踊り、楽器を奏で、絵を描き、物語を紡ぐ。そして子どもたちは、遊ぶ。

「狩りの仕方」や「コミュニケーション」では説明の付かない一人遊びを。

それはつまり、芸術は人間の魂にとって、「免疫シ

ステム」のようなものなのではないでしょうか。

なんらかの原因で、悲しみ、怒り、辛さ、その他いろいろで傷んだ魂を癒し、治していく手助けをする。

そうではなく、一時的に感覚を刺激・麻痺させるようなものもあります。それはそれであつてもいいとは思いますが、あまりそれに頼りすぎると、風邪を引いた時に対処療法的機能しかない市販の風邪薬に頼るような、あるいはもしかしたら、免疫システムの作動を邪魔したり、麻痺した魂が逆に休息を忘れ、回復を遅らせてしまうかもしれません。

今は技術の共有（&コピペ）がものすごく簡単にできますので、そういうものがいくらでも氾濫しています。いや、刺激物なら刺激物でもいいのです。でもそれが栄養物のフリをしているところに問題がある。

「治る」のはあくまで本人の治癒力であって、その治癒力をアシストするのが、いい芸術、いいコンテンツ、だと思っています。

今まで僕は、近松門左衛門師匠の

「虚と実の皮膜のうちに芸がある」

という言葉を、いろいろ解釈を試みてもどうも釈然と

しなかったのです。が、この芸術の働きを考えると、
「『合理性』と『神秘性』の境界域を叩き、魂を揺さぶれ！」

と読み替えられないでしょうか。「二つの認識の齟齬」は、おそらく人間が「言葉」や「道具」といった科学を手にしはじめた時からずっとある問題で、であるからこそ、同時期に芸術が勃興したのではないかと。

となると芸術家とは、意識するしないにかかわらず、「ここを突ける」人ではないか、と思うのです。

そう考えれば芸術家は古今東西だいたい悩んでますよね（笑） 「合理と神秘」、たとえば言い換えれば「義理と人情」に悩むから、その矛盾を何かに表さずにいられない、のです。

ゴッホの絵が、あんな歪んだ部屋の絵が、主題そのものがどうでもよいもので、官能的な美しさも無く、もちろん超絶技巧で圧倒するわけでもない、あんな絵がなぜ、人の魂を揺さぶるのか。それを突き詰めれば、彼の魂が激しく動いていたから、としか考えられませんか。

自分と作品の間に学習ループすなわちソウルドライ

ブが存在する。それが「いい芸術」で、そういう作品は当然のように、観る者と作品自身との間にも学習ループⅡソウルドライブを駆動しやすい、のでしよう。

そういうの作っていききたいですね。

■六 | DRIVE

以上です。今回のキモは文字通り、

「魂を動かせ！」
です。

本来、魂は勝手に素晴らしく動いてくれるはずのもので

しかし現代の我々は様々な原因によって、その作動を著しく制限されている。

その原因の排除ももちろん大切ですが、それと並行して「積極的に魂の作動を意識する」ことで、喪われた活力が蘇るキツカケになるのではないか、と思うのです。

魂の領域と頭の領域を分け、魂の得意な領域で意識的に動かしていくうちに、魂はすこしずつ活性を取り戻す。よりよく作動したその素直な判断に従って行動し、また現実を動かしていく。この繰り返しによってだんだんと、魂が動きやすくなり、また現実も動きやすくなってくる。

そこに、渦ができてゆきます。

自分が渦になり、周囲にも渦を巻く。

その過程で、周囲の人々の魂のフタもパカパカと開いてゆき、本人が予想もしていなかったような、より大きな渦が巻き起こる。

場合によつてはその渦はその人を離れ、勝手に大きなムーブメントに育つてしまうかもしれない。でもそれはそれで、大きな変化を世界に与えたキツカケを作つたこととして、棺桶に入るまで誇れることではないでしようか。

あなたがどれだけの渦を巻き起こすのか、それは誰にもわからない。もちろん、あなたにも。

DRIVE!

長々お読みいただき、ありがとうございます。またどこかでお会いしましょう。

二〇一二年冬　ながたかずひさ

■おすすりめ書籍

安富歩 『原発危機と「東大話法」』 『もう「東大話法」にはだまされない』 『超訳 論語』 『生きるための論語』

深尾葉子 『魂の脱植民地化とは何か』

竹端寛 『梓組み外しの旅』

この二冊は「叢書 魂の脱植民地化」シリーズなのですが、こちらに安富先生の『合理的な神秘主義』（仮題）が近刊の予定です。もろに本書のテーマですので、とても楽しみにしています。

並べるには僭越ながら僕の既刊『抗発狂薬』『テコ
をてばなす』『Ritchy&Bokun』あたりもお読みいた
だけますと、のたうち回りっぷりが楽しめめます。

■ おくづけ

「ソウルドライブ」(Ver.2)

作者 ながたかずひる

発行 サークル 「PowerNetwork!」

発行日 2012.12.31

mail nagata@mti.biglobe.ne.jp

web <http://rakken.net/>

twitterID KazuhisanNagata



Soul Drive
Powered by Kazuhisa Nagata